

# がんの教室

田中 伸哉

⑤

がんは何色か。悪黒のイメージから、黒い色を想像するかもしれない。がん細胞の集合体であるがん組織には色がある。がんに侵された臓器をメスで切ると色が見えてくる。がんは、意外にも白っぽい色のものが多い。胃がん、乳がん、大腸がん、食道がんなどは

## 侵された組織の色は

血の色を覆うので組織全体が白っぽく見える。余談だが、がん研究の最先端では、このコラーゲン繊維ができないようにする薬の開発が進んでいる。コラーゲン繊維は、マフィア組織に置き換えればさまざまな資金源だ。薬の開発は、マフィアをつぶすために、その資金源をたたくやり方に似ている。

## 部位で違い 治療法を決定

みな白っぽい。白っぽく見えるのは、がんが増殖する時に必要なコラーゲン繊維が増えるためだ。コラーゲン繊維は分厚いため、周囲の

話を本題に戻そう。がんには、白以外の色もある。肝臓がんは緑色だ。これはビリルビンという血液の中の赤血球が古くな

って分解されてできた色。また、筋肉や血管など

のがんである肉腫は、「にく」というだけあって生肉のような赤っぽい色だ。黒色腫は、その名の通り黒いが、メラニン色素を作り出す細胞ががん化したものだからだ。

このように、がんは部位によって色が異なる。ではがんの色を知ること

にどんな意味があるのか。外科医や病理医は、がん細胞の色を見ることが、がんかどうか、さらにはその臓器から発生したがん(原発性)か、転移したものかの診断に役立っている。これをもとに治療法が決定するから、大事なことなのだ。(北大医学部腫瘍病理学教授)

